

東海の古代

第242号 2020年10月

会長 : 竹内 強
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

尾張氏はどこから来たのか

名古屋市 石田 泉城

1 高倉下

尾張氏の出自については、様々な説があります。

「高倉下」は、日本神話に登場する人物で、書記では、夢で見た神託により神武天皇に霊剣布都御魂をもたらし神武天皇の窮地を救った神様です。

高倉下命は、愛知・尾張にある熱田神宮の境外摂社「高座結御子神社」（名古屋市熱田区高蔵町、熱田神宮の北1 km）に祀られており、『熱田神宮記』（明治30年頃、原典未確認）には、高座結御子神社について「**熱田大神御児神也トアリ、火明命ノ御子天香山命、一名ヲ高倉下命ト申ス**」とあるそうです。



また、天香山命（伊夜日子大神）を祀る越後一宮彌彦神社のウェブサイトには「**御祭神天香山命は高倉下命とも申し上げ、皇祖天照大御神の御曾孫にあたられます。**」とあります。（<http://www.yahiko-jinjya.or.jp/history/gosaijin/index.html>）

さらに『先代旧事本紀』天孫本紀では、物部氏の祖神である饒速日命を天火明命と同神

とするとともに、天香語山命の割註に別名を手栗彦命たくりひこまたは高倉下命あめのかごりということがあります。つまり、これらに従えば、物部氏と尾張氏は同族で、高倉下命は、天香山命あめのかごりや天香語山命の別名であり、天火明命（饒速日命）の子ということになります。

したがって、一般的には、尾張氏の祖は、高倉下命であり、天火明命（饒速日命）、ニギ尊の系統で天孫族ということになります。

2 乎止与命（小止与命）

一方、乎止与命（小止与命）は、『記紀』には登場しませんが、『先代旧事本紀』国造本紀では、乎止与命は、天火明命の十世孫であり初代の尾張国造とされます。熱田神宮境内摂社に上知我麻神社があり祭神は乎止与命です。

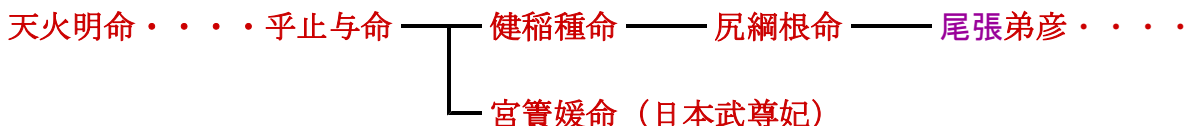
この上知我麻神社は、かつて松炬島（松子島）と呼ばれていた笠寺台地（名古屋市港区星崎）の星宮社ちかまに鎮座していましたが、大化三年（647年）に熱田に勧請されています。社名の知我麻は千竈で製塩の窯が数多くあることを意味し笠寺台地に地名が残っています。

また、熱田神宮の境外摂社である氷上姉子神社ひかみあねご（名古屋市緑区大高町）は、氷上山（火上山）の丘陵に鎮座し、熱田神宮の創祀以前に草薙剣が奉斎された地といわれています。氷上姉子神社の祭神は、宮簀媛命（美夜受比売）であり、『熱田宮縁記』（尾張国熱田太神宮縁記）では、氷上姉子は、宮簀媛と同一人物として、尾張国造の祖であるとされます。

したがって『先代旧事本紀』や『熱田宮縁記』にしたがえば、初代の尾張国造である乎止与命は、笠寺台地や氷上邑から熱田に移動したと考えられます。

3 乎止与命と天火明命

熱田神宮大宮司家の家系は、次のとおりとなっています。



乎止与命は、国造制度の時代の人物ですから、せいぜい西暦400年頃に初代国造になったと考えられます。

その乎止与命の祖は、天火明命や高倉下とされ、高倉下の時代は、百嶋神社考古学の年代では西暦200年頃とされます。となると、天火明命から乎止与命までの200年間の系譜が曖昧であり、にわかに天火明命が乎止与命の祖であるとするのは信じがたいです。

乎止与命が天火明命まで遡るとするのは、乎止与命の出自が神代、天孫族に繋がる由緒ある家柄であるとするために、熱田神宮大宮司家である尾張氏に、いわば付度して『熱田神宮記』では、天孫族につなげていると思われま。

天火明命から乎止与命までの系譜はわからないので、ほぼ実在と信じられるのは、初代国造として名が上がる乎止与命であり、乎止与命を尾張氏の祖と考えるのが妥当であると思います。

4 まとめ

以上のことから、尾張氏は、乎止与命を祭神とする上知我麻神社がかつてあった笠寺台地しゆつじが出自であり、宮簀媛命の出自は、宮簀媛命を祭神とする氷上姉子神社がかつてあった氷上邑であると考えられます。宮簀媛命が日本武尊妃となることで、尾張氏は地盤を固めていったものと思われま。

尾張氏の源流を探る

一宮市 畑田 寿一

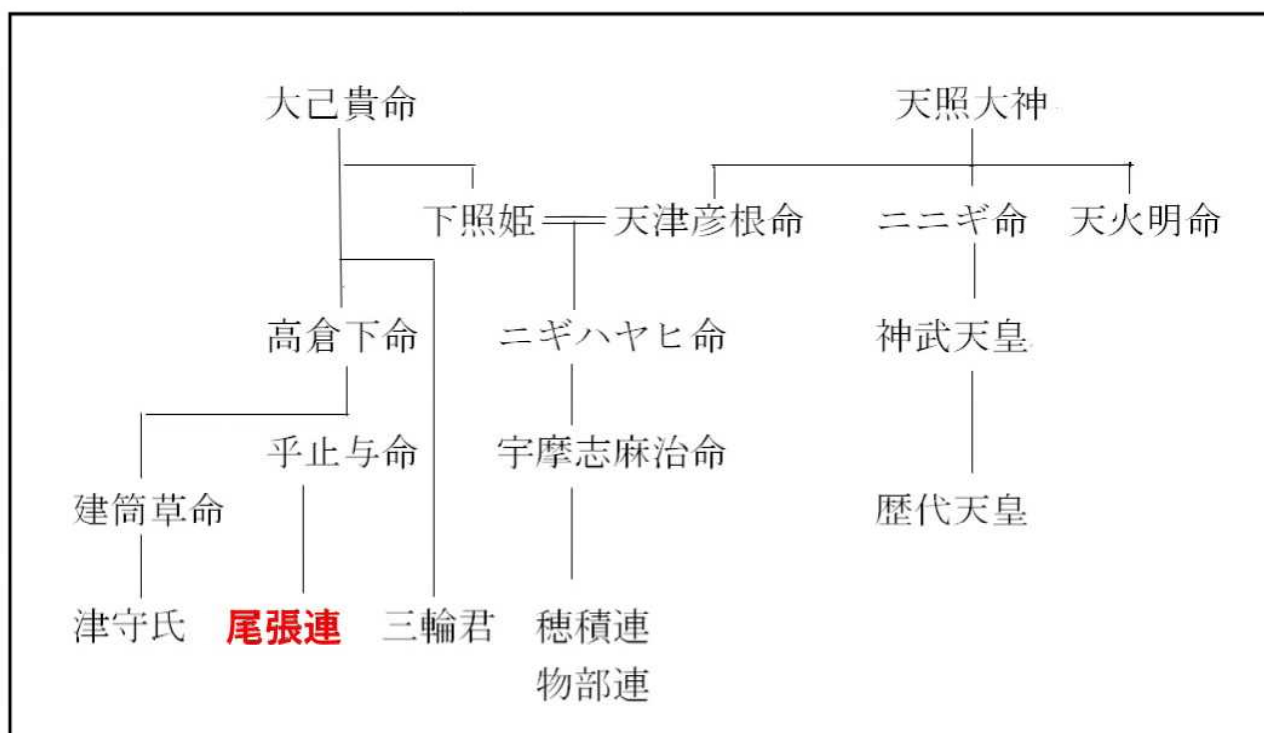
尾張氏は尾張国を基盤とする氏族で、早くからヤマト朝廷と関係を持ち、歴代の天皇の妃を輩出してきた。しかし、その系図については数多くの説が存在しており、特に『先代旧事本紀』や丹後国籠神社に伝わる「海部氏系図」などをどこまで信じるかによって大きく流れが変わる。

今回は、古代氏族の研究者の宝賀寿男氏の説を参考に、美濃や尾張北部での神社などの源流を求めてみた。なお、氏の見解としている部分は筆者の理解に拠るものであり、文責は筆者にあることを予めお断りしたい。

1 宝賀氏が示す尾張氏の系図

氏が示す系図は従来の説と若干趣を異にしている。

その特徴を示すと、次のとおりである。

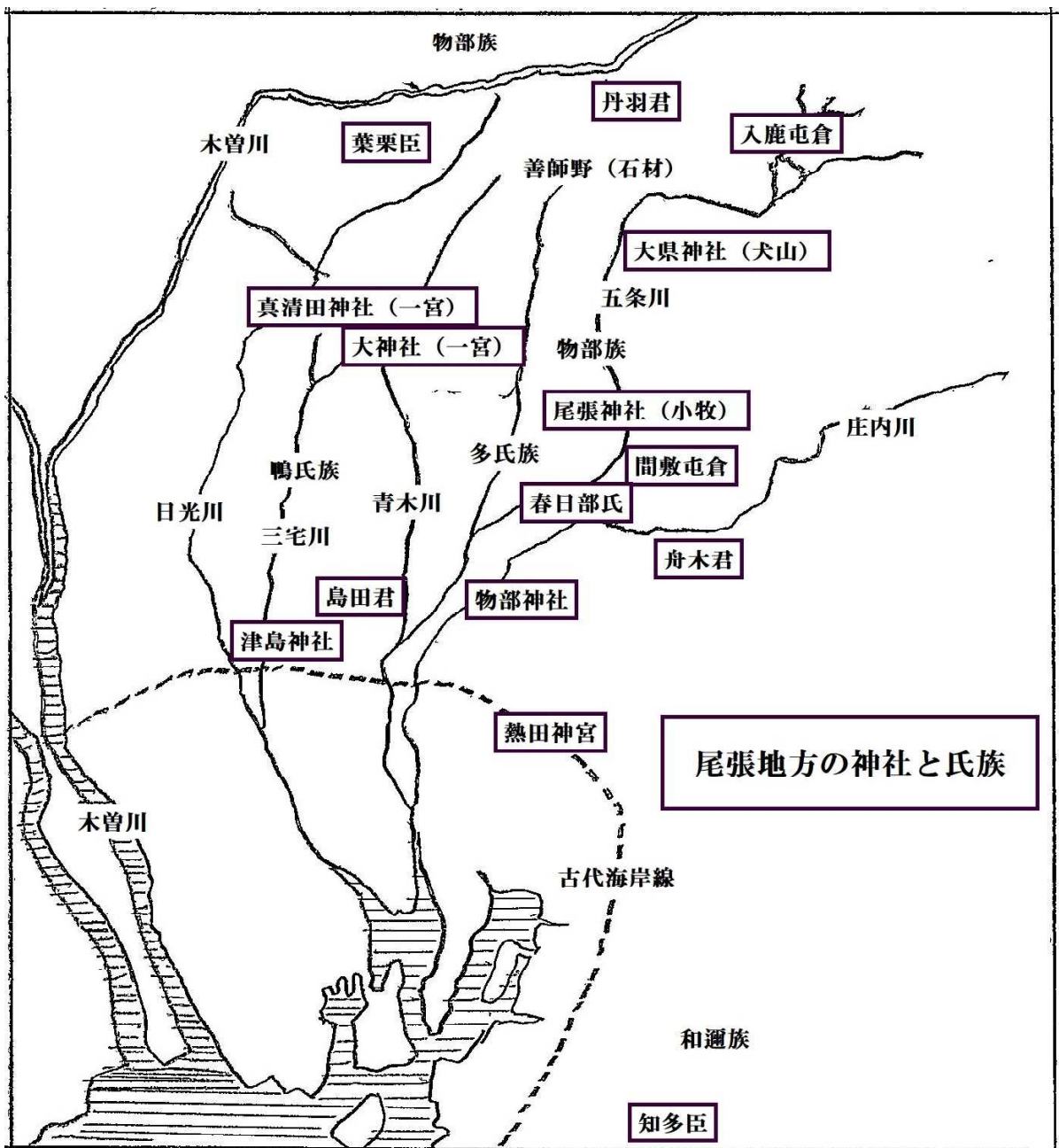


① 尾張氏の開祖を天火明命としない。

氏は根拠として物部は海人族でなかったとしている。鍵となるのは真清田神社（一宮市）であるが、この神社は現在は天火明命を祀っているが、江戸時代には国常立命を、その以前には大己貴命を祀っていた。この点からみても妥当なような気がするが、系図の繋りが大きく変わる。

② 大己貴命の故郷を出雲としない。

大己貴命の故郷を九州に求めて綿積族の一員とし、阿曇族などと同族としている。真偽の程は筆者の知識では判断できないが、その後の氏族の分岐には説明がしやすい。



2 古代尾張の開拓者

宝賀氏の研究に拠ると古代尾張の開拓者として次の氏族が挙げられている。

(1) 多氏族

成務期に尾張に派遣された仲臣なかとみのこがみ子上を祖とし、丹羽郡（丹羽君、前刀連）、海部郡（島田臣）、山田郡（舟木臣）などを挙げる。その中の丹羽県君の大荒田が尾張氏と婚姻関係を結んだとされている。

丹羽君を西からの渡来としているが、筆者は丹羽の祖先は邇波県君であり、弥生時代を生き延びた在来の勢力であったと考えている。一宮市の南部には多氏を祀るおおじんじや大神社があり、「於保」の地名も残っていることから多氏一族が住んでいたと思われ、海部郡を中心に、各地に多氏と関係がありそうな神社が存在する。

(2) 和邇氏族

一族には葉栗臣、知多臣、春日部があるとされている。

海人族であるので知多方面からの渡来であろう。葉栗臣は一宮市の北部の旧葉栗郡を中

心とした氏族で、「若栗神社」は孝昭天皇（第5代）が、この地の娘に生ませた天押帯日子命（天足彦国押人命）を祀るとしているが伝説にすぎない。筆者は本貫地の遺跡が4世紀以前に遡る点から在来の氏族と考えており、和邇氏族との関係は5世紀頃になってからで無かろうか。

春日部氏は春日井市、小牧市、北名古屋市などを中心とした地域が本貫で、継体天皇の妃を輩出するなど一大勢力であった。

和邇氏族は尾張統一の基となった勢力であり、色々な氏族と混ざり合っただけで統一が進んだと考えられる。

（3）鴨氏族

「中島郡を中心に栄え、崇神天皇期に美濃西部からの渡来とし、尾張大印岐や美濃国造の祖の神骨命も同族であり、乎止与命は尾張大印岐の娘を娶って旧勢力と結びついた。」とする説を採用されている。

この説に従うと乎止与命は西方から渡来し、小針（小牧市）で在来勢力と結びつき尾張氏になったと解釈されるが、筆者は「尾張氏本体は最初に庄内川沿いに居り、北上して小針に至った。」と考えている。鴨氏族は海人族であり、和邇氏と結びついた後に他の氏族を支配下にして行った。

中島郡には更に少し遅れて息長氏系の伊吹氏、石作氏などが中島郡に合流してきた。石作氏は尾張に集中しているが、石棺を作るような大きな岩は無い。木曾川の河原の石を使った古墳の葺石や灌漑などの石工事に従事していたと思われる。伊吹氏は鍛冶の専門集団で美濃の関市の刃物産業の源となった。伊富利部神社（一宮市北部）も鍛冶の神様であるが伊吹氏とは別系列とする説が有力である。

（4）物部氏族

美濃西部から渡来して、美濃国一体に広がった。先住の丹羽氏と結びつき、尾張氏が拡大を図る以前に尾張北部を席捲していたとされている。

この見解については同感で、美濃国は物部氏関連の神社も多く、国造の大半が物部氏である。物部関連の神社は一宮市付近にも多数存在し、名古屋市千種区には物部神社がある。

3 尾張氏の進展

宝賀氏は尾張氏の進展を次のように纏められている。

- ① 奈良盆地には2世紀頃に出雲を経由した三輪氏がおり、少し遅れて阿曇氏がいた。尾張氏はこれに属する。
- ② 三輪氏中心の古代国家は銅鐸文化であったが、神武天皇侵攻（氏は2世紀を想定）により、これが崩れた。しかし、分散化した各地には銅鐸文化は残り、尾張地方もその一例である。
- ③ 神武期には高倉下は重要な役割を果たしたが、大和において尾張氏も同様な役割を担った。
- ④ 崇神天皇期には東国の美濃・尾張に移遷を始め、景行・成務期にはヤマト王権に奉仕した。
- ⑤ 尾張氏の祖は天火明命ではなく、高倉下は大己貴命の末裔であり、阿曇氏や倭国造と同系である。海部氏も同じ流れにある。

以上の観点を参考に眺めると、「尾張氏は最初は大和にあり、天皇家と親密な関係を築いてきたが、崇神天皇期以降（4世紀初め）に尾張地方に移り、先行諸氏と結びついて、

最終的には尾張全土を掌握した。」ことになる。

4 熱田神宮の起源

日本武尊は東征の帰路に尾張の宮簾媛命の許に草薙剣を預けて伊吹山の神の征伐に出かけたが重傷を負い伊勢の能褒野で亡くなった。その後、草薙剣を祀るため宮簾媛の晩年に熱田神宮を創建したとされている。時期的には4世紀後半になるが、伊勢神宮の創建が7世紀頃とされているので、「大宮司系図」の中の朱鳥元年（688年）の記事から7世紀中頃とするのが妥当であろう。なお、神楽殿付近の発掘調査の結果、6世紀頃の土器が発見されているので、5世紀末には何かがあった可能性は高い。

草薙剣についても、天武天皇の病が剣の祟りであるとされて熱田神宮に移祀されたとする『日本書紀』の記述から7世紀と考えたい。

熱田神宮のある場所は古代には南に延びる台地であり、付近には弥生時代の貝塚が見られることから海に面した半島であった。ここに古代尾張氏が拠点を設定したと思われる。

5 尾張氏関連の古墳

尾張氏が進出する以前は西濃への人の流れがあり、象鼻山古墳などは3世紀まで遡る。尾張氏関連では志段味古墳群が4世紀前半に造られた。その中の白鳥塚古墳（東谷山山頂：115m）は規模も大きく、天理市の行燈山古墳（垂仁天皇陵）の二分の一のサイズで白色珪石で覆われており、建築当初はキラキラと輝いていたと思われる。近くには同様な装飾が施された尾張戸神社古墳（27m）もあり、宮簾媛の両親の乎止与命夫妻の墓に比定する説がある。これが正しければヤマト朝廷との関係が既に深く、ヤマトタケルの説話も現実性が増す。

5, 6世紀になると古墳は南西方向の熱田神宮付近に造られるようになるとともに、味美（春日井市）付近まで広がる。断夫山古墳（151m）を尾張連草香に、味美二子山古墳（96m）を継体天皇の妃の目子媛に比定する説が有力である。



4世紀以降の尾張氏関連の古墳は尾張平野の東側を流れる五条川沿いに造られた。上流域には入鹿屯倉が、中流域には間敷屯倉も造られてヤマト王朝と関係の深さを物語っている。また、犬山市付近の善師野で採れる石で作った石棺も流域各地で使われており、水運にも重要な役割を果たしていた。

現在の河川は中流域で大きく西に流れが変わるが、南に下がる河川跡も残っており、古代に大規模な河川工事が行われた可能性を秘めている。この工事が事実であれば、大阪平野の茨田堤（5世紀）を超える大工事であった。

6 まとめ

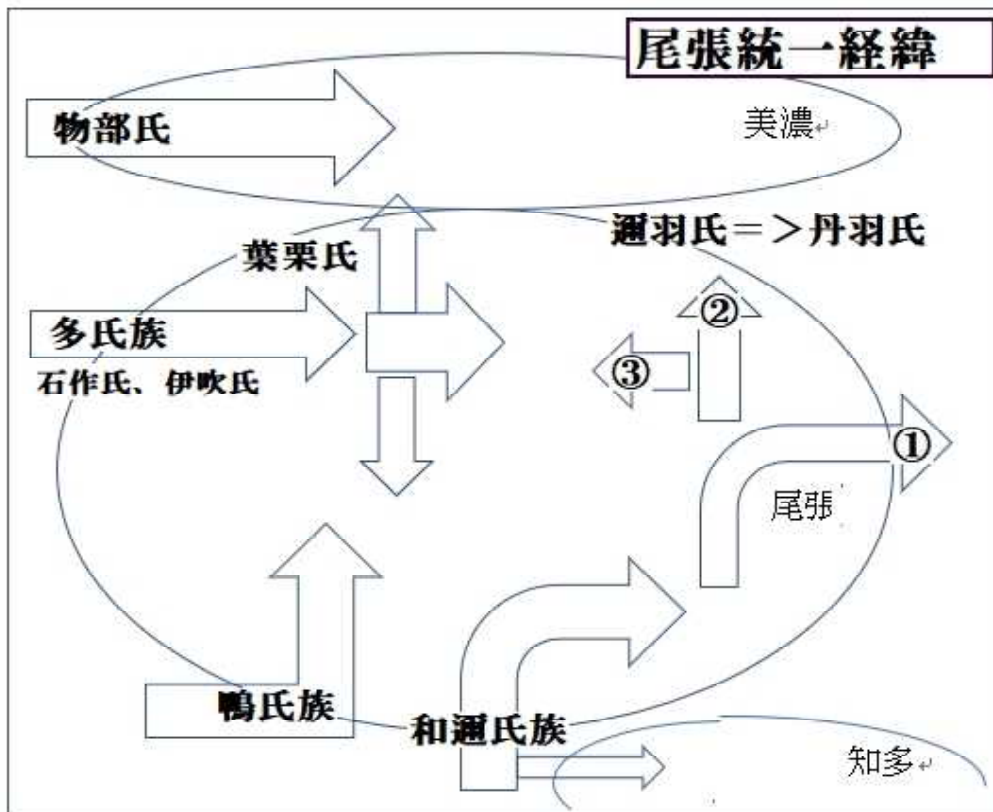
2世紀頃に各地のデルタ地帯で大規模な弥生集落が誕生した。尾張地方では荒尾南遺跡（大垣市）、中山遺跡（一宮市）、岐阜金華山南周辺（岐阜市）、鶉沼遺跡（鶉沼市）、朝日遺跡（清須市）などがこれにあたる。しかし、2世紀後半になると天候が不順になり、これらの集落は姿を消して周辺の高台に移動する。

3世紀に入り気候が安定化するに伴い、集落の再編成が起こる。この時期に西から物部氏を中心とする勢力が進出して美濃地方に定着し、ヤマト朝廷の初期の成立に貢献した。これは纏向遺跡に東海系の土器が多いことでも証明される。

4世紀に入ると西から多氏族、南からか海人族が移動してきた。宝賀氏は和邇氏族とされているが、もっと広く綿積系全般と考えた方がよいのではないか。

海人系の勢力は、5世紀に入り熱田神宮付近に集結した後、現在の五条川、青木川流域を中心に犬山付近まで勢力を拡大した。その後、更に尾張北西部に進出するとともに北部からの物部氏系と結びつくことにより尾張の統一は完成した。

今回、宝賀氏の説を参考としたが、この説に従えば、「東海地方に三種の神器の内の2つが安置されているのは、崇りを恐れたヤマト王権が元の持ち主の大己貴命の子孫に返した。」とも解釈ができ、興味深い説である。



尾張氏と熱田神宮主要摂社の奉斎氏族との関係について

東海市 大島 秀雄

1. はじめに

『古事記』景行段には倭建命が東征の途中に尾張国に立ち寄り、尾張国造の祖先である美夜受比売みやずひめの家に行ったとする記事を載せていますが、『先代旧事本紀』国造本紀では天火明命の十世孫の小止与命が尾張国造を賜ったとされており、これは通説とは親子関係が逆転しているようなので、その真偽を含めて尾張氏と熱田神宮の主要摂社の奉斎氏族との関係を探っていこうと思います。

2. 尾張氏系譜

『先代旧事本紀』天孫本紀の尾張氏系譜（後掲の加藤謙吉氏の書籍の系図を引用）は次のとおりであり、この系図に美夜受比売は出てきません。

また、この系図では火明命の十世孫の淡夜別命と十一世孫の乎止与命の親子関係は疑問とする意見があり省略しているものと解釈されます。

『日本書紀』の景行天皇段で宮簀媛みやすひめは尾張氏の女として、また寛平二年（890年）の年紀を有する『熱田太神宮縁記』によれば、宮簀媛の父が乎止与命、母が真敷刀婢命ましきとべのみこと、兄が建稻種命たけいなだねのみこととなっていますが、天孫本紀の尾張氏系譜に従えば真敷刀婢命が尾張大印岐（印岐=忌寸かばねか）の女で、大は美称であり、忌寸は天武朝に作られた姓なので、後世の付会と思われます。

3. 上知我麻神社・下知我麻神社と奉斎氏族

尾張氏が奉斎していた熱田神宮の現在の祭神は熱田大神で、相殿神は天照大神、素戔嗚尊、日本武尊、宮簀媛、建稻種命ですが、熱田神宮の境内摂社である上知我麻神社や下知我麻神社は確かな情報は無いものの、おおよそ次のような名称の変遷をたどったと考えられます。

(1) 上知我麻神社（祭神：乎止与命）

上知我麻社（平安時代）→ 源太夫社（鎌倉期）→
源大夫社（江戸期）→ 現在

(2) 下知我麻神社（祭神：真敷刀婢命）

下知我麻社（平安時代）→ 紀太夫社（鎌倉期）→
紀大夫社（江戸期）→ 現在

一方、『平家物語』百二十句本の剣の巻上では、倭建尊が東国へ御下りのとき、尾張国松が小島の源太夫の娘岩戸姫と一夜の契りを結んだとあり、また剣を田作りの記太夫が田の中の杉

系図 「天孫本紀」の「尾張氏系譜」



原に置き、剣の光熱で杉が焼けて今の熱田の地名になり、岩戸姫・源太夫・記太夫が神として祭られたとの伝説を載せています。

松が小島とは松炬島（笠寺台地）のことであり、名古屋市南区本星崎町に鎮座する星宮社の境内社に上知我麻神社と下知我麻神社があることから、熱田神宮の境内摂社の上知我麻神社・下知我麻神社の旧地が松炬島の千竈郷ちかまにあり、後に熱田の地に遷座されたのかもしれない。

さて、『和名抄』の愛智郡千竈郷がどこに比定されるのかですが、江戸時代の山崎村、戸部村、桜村、新屋敷村が明治時代の一時期、千竈村であったことや、現在の国道1号線に千竈通の名前が残っていることから、笠寺台地の北側が千竈郷と思われます。現在の岩戸町（岩戸姫の名残か）はかつての千竈村の北端にあり、星宮社が笠寺台地の南端に位置することから関連付けるには若干の疑念はありますが、源太夫が住んでいたのは岩戸町付近であろうと推定されます。

追加の事項として、熱田神宮の正門（南門）付近にある境外摂社の松まつご姫社の現在の祭神は宮簀媛ですが、松姫は松炬島の美しい女性を想像させる名前であり、元の祭神が岩戸姫であった場合には、上記の『平家物語』において3名が神として祭られたとする内容と合致し、松炬島から3神社が揃って熱田の地に遷座されたものと考えられます。

鎌倉幕府の御家人で、得宗家の被官でもあった千竈郷を本貫とする千竈氏は薩摩・川辺郡、屋久島、奄美大島などを支配し、室町時代に入ると薩摩の島津氏の配下に入ったとされているので、千竈氏が元の上知我麻社や下知我麻社の奉斎氏族で、千竈郷を離れるにあたり、先祖の祭祀を尾張氏に託した可能性が考えられます。

以上の事から、上知我麻神社と下知我麻神社の現在の祭神は『先代旧事本紀』天孫本紀の尾張氏系譜から借用したものであり、元の祭神からは変更されているのでしょう。

4. 氷上姉子神社と奉斎氏族

名古屋市緑区大高町に鎮座する熱田神宮の境外摂社である氷上姉子神社の祭神は宮簀媛命ですが、この神社の神主家は久米氏です。

『尾張群書系図部集（上）』（加藤國光編、続群書類従完成会、1997年）にはこの久米氏の系図が収められており、その内容は来目長を初代とし、11代には常見がみえ、「尾張姓祖建稻種命五世裔胤大海部直多与志連の後葉」の注記があり、また15代には乎幾与がみえ、「尾張国愛知郡大領外従五位下尾張宿祢乎己志の子」の注記がありますので、久米（来目）氏と尾張氏との姻戚関係がうかがえ、久米氏がずっと氷上姉子神社の奉斎氏族だったようです。

久米氏が元々は大和の軍事氏族であったことや、『熱田太神宮縁記』（『愛知県史』資料編六）では、「**日本武尊、尾張に還り向かひて、篠城邑に到る。食を進るの間、稻種公の儻従久米八腹、駿足を策ち、馳せ来たり、啓して曰く、「稻種公海に入りて没す」と。**」とあり、建稻種命の配下に久米八腹なる人物がいたようです。

一方、元禄十二年に作成された『熱田宮旧記』では久米直七拳脛の子、または兄弟の久米八甕は日本武尊東征時に膳夫として仕えたとありますが、『日本書紀』の景行天皇段では日本武尊の膳夫は七掬脛ななつかはぎとなっており、日本武尊に従った久米氏の人名に混乱がみられます。

また、尾張藩士の堀忘斎の撰になる『厚覧草』あつみぐさでは、「**熱田正縁記云、景行天皇四十一**

年、草薙劍氷上村に留る、其後宮簀媛、老後松炬島に社を建て納む。孝徳天皇大化二年尾張忠命等、託宣に依て愛知郡会崎機綾村に遷座なさしむ、則今の大宮是なり。熱田本記亦同し、右木下宇左衛門説。」とあり、軍事氏族の久米氏が所持していた草薙の劍が氷上姉子神社から千竈郷へ移動、さらに熱田神宮へと移動したということでしょう。

なお、久米氏の系図に美夜受比売（宮簀媛）は出てこないのも、美夜受比売は久米氏の伝説的な姫の可能性がります。

5. 尾張氏の実態

尾張氏の実態については『日本古代の豪族と渡来人』（加藤謙吉著、雄山閣、2018年）に詳しいが、その概要は次のとおりです。

- (1) 尾張氏とは一系的な氏族集団ではなく、尾張国の各地を拠点とした様々な在地首長集団が連合して、対外的に「尾張」をウジ名とする同族集団を形成した可能性が高い。
- (2) 尾張氏とその同族には、中嶋郡や海部郡、春部郡、愛智郡の尾張氏が、また同族には甚目（はため・ひじめ）氏、高尾張氏、小治田氏がみえる。
- (3) 5世紀から6世紀にかけて愛知県春日井市の庄内川中流域に白山神社古墳、御旅所古墳、二子山古墳、春日山古墳などの味美古墳群を造営した春部郡の氏族グループの内、熱田台地に勢力を拡大して断夫山古墳、白鳥古墳、大須二子山古墳などを造営した愛智郡の氏族グループが尾張氏の中核となった。
- (4) 5世紀代に瑞穂台地に高田古墳、八幡山古墳、八高古墳などを築造した愛智郡の氏族グループは、熱田台地に勢力を拡大したグループと結びつき尾張氏という擬制的同族組織の中に組み込まれていったと想定することも可能である。
- (5) 尾張氏の中央進出時期は継体の即位の頃か、それ以降（安閑・宣化の時代）であろう。

ここで、そもそも上知我麻神社や下知我麻神社が熱田神宮の境内摂社であるということは、乎止与命や真敷刀婢命が瑞穂台地やさらにその先端に続く笠寺台地に進出した氏族グループに属する一族で、中世では千竈氏を称していたが、古代では尾張氏を称していたと考えることも的外れではないのかもしれない。

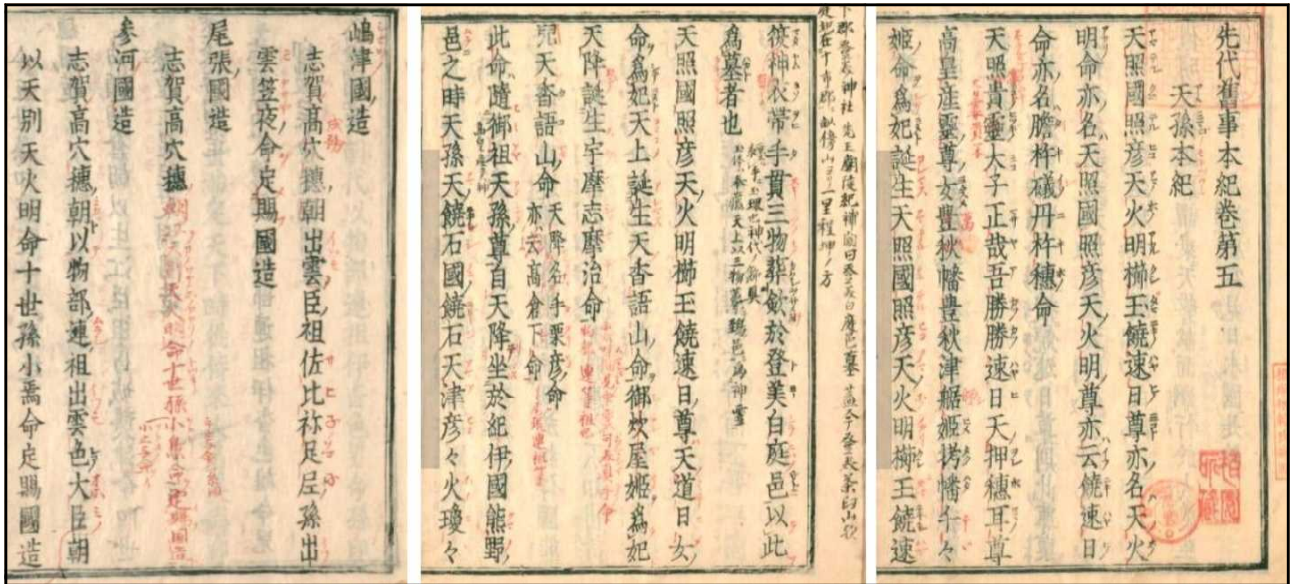
6. まとめ

尾張氏の中の熱田台地や瑞穂台地・笠寺台地に進出した2系統の氏族が、大和から移住してきた久米氏と結びついていった様子がうかがえますが、前掲書で加藤氏が「**そもそもヤマトタケルがミヤズヒメと結ばれる『記紀』の話は、草薙劍を祭神とする熱田社の起源を説くことに本来の意味があり、(中略)時代的な整合性という立場からミヤズヒメを建稲種公(乎止与命の子)の妹とし、あわせて建稲種公がヤマトタケルの東征に同行するというストーリーを作り上げたものとみられる。**」と指摘したことは重要なポイントですが、久米氏が尾張に移り住んだ背景として、当時からヤマト王権に尾張進出の意図があったことを見逃す訳にはいかないと考えます。

とが多い。最も多くの人々に愛用された史書と思われる『古事記』でさえ、その写本は鎌倉期に写本された名古屋の大須真福寺本が遺されているに過ぎない。『原旧事本紀』が失われていたとしても少しも不思議はない。

私は、『原旧事本紀』を写本した人物が家蔵し、それが代々伝えられていく内に、何らかの必要があって、新たに追記したのではないかと考えている。 <中略>

したがって、現行の『先代旧事本紀』の記述中追記等が行われていない記述は、そのまま推古朝に書かれたもの、と考えるとよいのではないかと、これが私の結論である。



前回の例会の内容

■ 「前方後円墳体制」批判

名古屋市 石田泉城

前方後円墳の造営を大和王権の許可制とする仮説「前方後円墳体制」は、大型の前方後円墳が関東に多いことなどから根拠希薄であるとした。

■ 善光寺縁起の聖徳太子御書並如来御返翰の考察

東海市 大島秀雄

「聖徳太子御書並如来御返翰」の6通の手紙は聖徳太子が当事者では無く、小山善光寺と奈良県の法起寺とのやりとりに関する記録である。

■ 元岡製鉄コンビナートと7世紀の九州

一宮市 畑田寿一

7世紀、ヤマト王権は政治の拠点を抑えているのみであり白村江の戦い以後も元岡製鉄コンビナートは九州王権の主導で操業が継続された。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。事前の参加連絡不要。例会で発表の場合は資料20部を用意ください。

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 10月11日(日)13時半～(第1集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
 - (1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
 - (2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
 - (3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
 - (4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
 - (5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会

11月8日、12月13日

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当：石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 10月23日(金)

<基準>表題はゴシック体で、これを除きすべてMS明朝12ポイントで作成のこと。